

論 文

## 新島八重の和歌について

吉 海 直 人

同志社女子大学  
表象文化学部・日本語日本文学科  
教授

## A study on waka of Nijima Yae

Naoto Yoshikai

Faculty of Culture and Representation, Department of Japanese Language and Literature,  
Doshisha Women's College of Liberal Arts,  
Professor

## 要 旨

新島八重の研究において、八重自作の和歌は彼女の心情を探る上でも重要な資料だと思われる。そこで現在知られている八重の和歌をすべて網羅し、それを詠作年代順に並べてみた。その上で、一首毎に和歌の内容を検討してみた。その結果、若い山本八重時代の和歌がないこと、もっとも早い歌は鶴ヶ城開城に際して詠まれた「明日の夜は」であることがわかった。これは唯一、川崎八重時代の和歌である。その後、新島襄と結婚した後はほとんど和歌を詠んでおらず、襄が亡くなった後、堰を切ったように和歌を詠んでいることが明らかになった。また晩年には会津若松に関する和歌が増加しており、さらに八重自身の人生の節目に詠まれた和歌も少なくないことがわかった。

## 一、はじめに

新島八重のことを調べるにあたって、当初から私は八重が詠んだ和歌に注目していた。それは八重自筆の短冊・書幅や書簡に書かれた和歌が、意外に多く残っていると想ったからである。しかも書かれた字体が変体仮名に近いものであったこと、おそらく現代の研究者にとつてはその判読が難しいのではと思つた。日本の古典和歌を専攻している者であれば、それはさほど問題にならないことであつた。だからこそ私の出番だと考えた次第である。そのことは、既に新島襄と関係の深い「吉野山」の和歌で部分的に実証済みのことであつた。<sup>1)</sup>

そこで手始めに、現在知られている八重の和歌を残らず拾い集めてみることにした。参考になつたのは、かつて八重の和歌を集めた「丹鶴抄」の存在である。これは八重の米寿をお祝いする「同志社校友同窓会報」61号（一九三二年二月）に掲載されているものだが、そこに八重の和歌10首がまとまつて掲載されており、非常に難かつた。

それを見て、おそらく八重は生涯にこれに倍する和歌を詠じているに違いあるまい（襄より多い？）と思ひ、社史資料センターの所蔵品に期待しつつ、さらに手広く雑誌記事などを調べてみた。すると短時間で10首あまりの和歌が増補できたので、拙著『新島八重愛と闘いの生涯』（角川選書）には、八重の和歌22首を収めることができた。と同時に、八重の人生を語るのに、和歌が有効であることを確信した。そこでさらに和歌の発見に努めてきた。

大河ドラマ「八重の桜」の効果であろうか、その後も和歌短冊などの発見が続いたので、30首は簡単に超えるだろうと予想をたててみた。ところが途中で増加が止まつてしまい、なかなか30首を超えられなかつた。あるいはこれまで知名度が低かつたので、かなり処分されてしまつていられるかもしれない。そのため研究も停滞してしまつたのだが、最後になつて八重が風間久彦に充てた書簡が紹介された。これによつて八重の newly 和歌が一挙に5首も増加し、ようやく30首を超えることができた。やはり八重の書簡を発掘するのがもっとも近道のようなのである（最後の宝庫は八重の遺産を相続した広津家であろう）。

ここで一つ疑問が生じた。一体八重は、誰にいつどのように和歌の手ほどきを受けたのだろうか。概して当時の武家の娘は、教養として和歌や書道の嗜みがあつたようである。会津藩の女子教育の中で、普通に和歌の手ほどきが行なわれたのであろうか。もしそうなら、和歌を教えた教師の存在が気になつてくる。

八重自身は明治33年の大久保真次郎宛書簡の中で、「歌ともあい成り申せず候へ

ども、腰折をお笑いぐさに御覧に入れ申し候」（「上毛教界月報」16号）と書き添えている。また昭和5年の風間久彦宛書簡でも、「小妹（私）は本来歌よみにあらずただただ出鱈目、お笑いぐさに」と書き添えている。もちろんここには多分に八重の謙遜が含まれていると思われるので、その点には注意が必要であらう。というのも八重の和歌を見る限り、そんなに稚拙だとは思われないからである。

## 二、「会魂抄」（新島八重和歌抄）

最初に、現在までに見つけた八重の和歌34首を、詠まれた年代順に並べてみた。これが現在わかっている八重の和歌のすべてである。見渡すと、面白い傾向（空白期間）がすぐに見えてきた。それは、八重は襄と結婚している間、ほとんど和歌を詠んでいないということである。襄は八重宛の手紙に和歌を添えなかつたのだろうか。<sup>2)</sup>

むしろ八重は襄が亡くなった後、堰を切つたように和歌を詠みはじめている。また晩年（大正以降）はそういった要請が生じたことで、会津関係の和歌を詠じることも少なくなかつたようである。加えて八重は、喜寿や米寿など節目節目に和歌を詠じていることも見逃せない。

なお仮に歌集の名を「会魂抄」と命名したが、それは八重の生涯が会津魂で貫かれていたと思つたからである。

## 「会魂抄」

戊辰長月二十日あまり三日の夜、さしのぼる月のいとさやけなるを見て

1 明日の夜は何国の誰かながむらむなれし御城に残す月影 〈社史その他〉

須磨にもものしけるとし（詠歌年未詳）

2 たちならぶ松原ごしに見ゆるかな月照り渡る須磨の浦波

（詞書なし・詠歌年未詳）

3 かえらざることとしれどもいくたびかおもひいだしてぬる袖かな 〈不一〉

（明治23年2月）

4 たのみつる竹は深雪に埋もれて世のうきふしをたれとかたらむ 〈社史〉

（明治23年3月）

5 大磯の岩にくだけししらなみも玉とかがやく世にこそありけれ

（大磯にくだけし波も白玉とかがやく世こそうれしかりけれ 国民新聞）

夫のみまかりける年の春（明治23年春）

6ひとりねの寢覚の床は春雨のおとさくさへもさびしかりける  
 7心あらばたちなかくしそ春がすみ御墓の山の松のむらだち 〈社史〉  
 8大磯の岩にくだくる波の音のまくらにひびく夜半ぞ悲しき 〈社史〉  
 9大磯の浪に砕くる月影はいかに淋しき姿なるらん

(明治33年裏の10周忌)

10あづさ弓十年の春のけふもまたかへらぬ人をしたひぬるかな  
 11うぐひすの初音をつくるこのごろは昔の春をしのばるるかな

(述懐)

12打寄するうき世のなみはあらくともこのころの岩はうごかざりけり

祝(明治40年)

13ちはやぶる神の道をもしらぬ身のけふのいはひにまじる嬉しさ

〈会津若松教会〉

御大典のある月の三日おのが誕生日なれば(大正3年11月3日)

14大君のめでたきみ代に七十路のよはひかさぬる身こそ幸なれ 八重子 〈社史〉

古里 新島八重子七十七(大正10年)

15東山弓張月はてらせどもむかしの城はいまくさの原 〈会津会報19号〉

大正十三年春を迎えて

16いつしかに八十路の老となりにけり射がごとくに年月はへて 〈社史〉

大正十三年の春御慶事の折に自作二たふしの茶杓に

17相生のまつにならひてさかえませみどりのいろは千代に八千代に

御慶事をききて(昭和3年)

18いくとせかみねにかかれる村雲のはれて嬉しき光りをぞ見る 〈社史〉

戊辰あき(昭和3年秋)

19六十とせのむかしをかたる友もなくあはれさみしきこほろぎのこゑ 〈社史〉

(84歳の詠)

20ふるさとの萩の葉風の音ばかりいまもむかしにかはらざりけり 〈葵高校〉

御盆をいただきて(昭和3年11月)

21数ならぬ身もならぬ大君のめぐみの露にかかるうれしさ 〈社史〉

昭和三年十一月十七日黒谷にて 八十四歳八重子

22千代ふともいろいろかはらぬ若松の木のしたかげに遊ぶむれづる 〈社史〉

(昭和4年)

23ものゝふのわざはいみじに習ふともやまと心はうごかすなゆめ 〈社史寄託〉

昭和四年十二月

24老ぬればふでとることも物うくてもおもふかたにも音づれもせず 〈風間〉

柏木氏の月報を見て(昭和5年2月)

25ありし世にともに祈りしことの葉をおもひ出してぬるる袖かな

昭和五年二月

26さみしくも一人やまいに伏柴のもゆるところをおもひこそやる 〈風間〉

27幾そたびとはんとすれどとへもせぬ身のおこたりをくゆとこそしれ 〈風間〉

去月二十三日亡夫四十年祭の折に

28わかれしはただつかのまとおもひしにはやくもたちし四十年の今日 〈風間〉

同時

29あづさゆみ春たち来れば大磯の岩うつなみの音ぞなつかし 〈風間〉

ふるさとわすれがたく(昭和5年4月)

30若松のわがふるさとに来て見ればさきだつものはなみだ成けり

31たらちねのみはかのおとをふこともけふをかぎりとなくほととぎす

32老ぬれど又も越えなむ白河の関のとぎしはよしかたとも

寿(昭和7年正月)

33あしたづのなくをききつつうれしくも来てふ文字の年を迎へぬ 〈社史〉

曉鶏声(昭和7年元日)

34幸おほきとし来にけりともろ人にあかつきつぐるくたかけの声

その他(参考)

大野ぬしの金婚をいはひて

35こまやかにちざり重ねて松が枝に千代よぶ田鶴のこゑさやかなり 〈古書目録〉

36たけの子を見ても生ひたちまなべらおやにまさると人のいふまで

〈会津新選組記念館〉

### 三、八重の和歌の解説(その1)

八重の和歌の中で、最も早く詠まれた和歌は「明日の夜は」である。これは慶應4(明治元)年の鶴ヶ城開城(敗戦)の際に詠じられたものとされている。この時点で八重は川崎尚之助の妻だった。そうなるに現在のところ、これ以前つまり山本八重(独身)時代の和歌は存在しないことになる(大河ドラマの中で詠まれた八

重の和歌の出典は未詳)。要するに八重に関しては、明治以降の和歌しか残っていないわけである。

1にまつわる話が多い。最初にこの歌が掲載されたのは、東海散士(柴四郎)著『佳人之奇遇巻二』(明治18年)である。そこには挿絵入りで紹介されている。ただし作者名はなく、また初句も「明日よりは」と異なっている。明治40年以降、ようやく八重の歌として広まっている。それは八重が篤志看護婦の活躍によって勲六等宝冠章を受賞し、知名度が上がったからであろう。

この歌には城を開け渡す無念さと同時に、勝者の官軍側に風流の有無を問う内容が込められている。その折、八重だけが代表で和歌を詠んだとは考えにくいのだが、何故か八重の和歌だけが有名になっている。あるいは八重は、その時死を覚悟し、辞世として詠んだのかもしれない。そのため内容的には、会津藩士全員の気持を代弁していると思われる。それもあつて晩年(会津藩復権後)にはしばしば揮毫を求められており、少なくとも10点以上はこの歌の書かれた八重自筆の書が残っている。なお詞書に「二十三日」とあるが、正しくは「二十二日」のこととされている(八重の記憶違い?)。いずれにしても最初に詠まれたこの歌が、八重の代表作であることは間違いない。

2「たちならぶ」は、詠まれた年代を特定できそうもない。ただし「須磨にもものしける時」という詞書が付いており、須磨海岸が詠まれていることから、裏が神戸で保養している時に詠まれた可能性が高い。それは明治19年・20年・22年のいずれかの年である。先に八重は裏との結婚時代に歌を詠んでいないと言ったが、ひよつとするとこれは須磨海岸を2人で散歩中に詠んだ、八重の結婚時代唯一の和歌かもしれない。

3「かえらざる」も資料がないために、詠まれた時も状況もよくわからない。小枝弘和氏は会津関係の古い写真と一緒に引用し、故郷会津を想起しての歌とされている(『時代を駆ける新島八重』51頁)。同様に岩澤信千代氏も、八重の望郷の想いが伝わる歌と解釈されている(『不』168頁)。ただし岩澤氏は別解として、亡き裏を想起しての歌とも解釈できると付け加えておられる。なるほど内容的にはどちらに解釈することも可能のようである。

仮に会津への思いとすれば、明治15年に15年ぶりに帰省した際の感慨かもしれない(もちろん大正10年(2度目)、昭和5年(3度目)でもかまわない)。これが裏への思いならば、明治23年以降、おそらく裏の命日などに亡き裏をしのんで詠んだものではないだろうか。私にはこちらの解釈の方がよさそうに思える。今後、詠歌時期を決定できるように資料が見つかることを期待したい。

4以降は裏が亡くなった後、つまり明治23年以降に詠まれた和歌である。興味深いことに4「たのみつる」は、八重がまとめた「亡愛夫裏発病ノ覚」の末尾に、自らしたためた和歌であった。その日付は明治23年2月10日となっている。1月23日に亡くなった裏のことを思い出しながら看病のことを筆録したもので、必然的にこの和歌からは夫を亡くした八重の悲しみが伝わってくる。もちろん「竹」の縁語で「節」が用いられており、技巧も整ったいい歌である。

5「大磯の」には二つのバージョンがある。一つはカッコに入れているもので、国民新聞(3月11日)に掲載された形である。もう一つは、それに対して八重が抗議を込めて徳富蘇峰(国民新聞社)に書き送った形である。その手紙には、前文御尊免。貴社御新聞に私の和歌御かがげに相成候処、私の和歌は、

大磯の岩にくだけししらなみも玉とかがやく世にこそありけれ  
右の通り相認め候と存候得共、ちがへ(ひ)居申候間、右申上候。しかし何れにてもよろしく候えども、鳥渡申上候。草々

と記されている。誰が手を入れたのかわからないが、おそらく八重は「うれしかりけれ」という表現が気に入らなかったであろう。ここでは八重の主張する自作を先にあげることにした。

6・7・8は連作のようである。「丹鶴抄」にも「夫のみまかりける年の春」という詞書でまとめて掲載されている。3首とも哀傷歌であるが、この中では7「心あらば」が一番面白い。というのも同志社新聞に掲載された「新島未亡人回想録」の末尾に、

新島先生のお墓が建てられた時、その墓の上に大きな旗を立てて、新島さんの家から見えるやうにしてありました。そして未亡人ははるかにその旗を眺めて  
尽きぬ名残を惜しんで居られた時の作。

と長い詞書を伴って掲載されているからである。こういった詠歌状況の説明がなければ、歌の内容を正しく理解することは容易ではあるまい。現在の環境では到底不可能かもしれないが、当時は新島旧邸から遠くの旗を見ることができたことになる。

8「大磯の」は「上毛教界月報」16号(一九〇〇年二月)において、八重が「(裏の)二周年の折によみしが今も同じ思ひ」と述べているものである。それが前述の「丹鶴抄」では亡くなった年の春に分類されているので、両者の間に1年のずれが生じる。もちろん八重にとって、裏を亡くした悲しみはただか1年の違いで変わるものではない。

9「大磯の」は「上毛教界月報」45号(一九三二年七月)に掲載されている和歌である。歌が詠まれた時からかなり時間が経過していると思われるので、実際に裏

が亡くなった年の春に詠まれたものかどうかはわからないものの、とりあえずここに配置しておきたい。いずれにせよ「大磯」という地名は、裏の亡くなった場所とすることで、キーワード的に繰り返し八重に想起され、和歌に詠み込まれ続けている。なお八重の和歌を調べる上で、大久保真次郎発行の「上毛教界月報」は貴重な資料であった。

10 から12までは、裏の10周忌に詠まれた歌である。8と同様、「上毛教界月報」16号(一九〇〇年二月)に掲載されているものである。ただし12「打寄する」は、「述懐」とあるように八重の心(信仰)の強さを詠じている。これは資料的に貴重かもしれない。

13「ちはやぶる」は、会津若松教会の自給独立式(明治40年)の祝いとして八重から贈られたものである。枕詞「ちはやぶる神」をキリスト教に援用している。その時の牧師は、会津若松出身の兼子重光であった。ただし現存する短冊は、八重の書簡に書かれた和歌を、誰かが短冊に書いたものであろう。現存する短冊は八重の自筆とは認められないものの、和歌自体は八重の作と見てよさそうである。

#### 四、八重の和歌の解説(その2)

14「大君の」は、大正3年の大正天皇の御大礼に合せて、八重の誕生日(旧暦)に詠まれた和歌である。ちょうど八重70歳(数え)記念の年であった。これ以降、八重は節目節目に祝いの歌を詠じている。

15「東山」は大正10年、八重の喜寿(77歳)の年であるが、2度目の会津若松訪問の際に詠まれた歌である(京都ではなく会津若松の「東山」。この時は広津一家も同行しているので、得意の籠城戦の語りを披露したことであろう。その時八重が籠城した思い出の鶴ヶ城は、既に取り壊されていて跡形もなかった。「月」を詠じているのは、あるいは「明日の夜は」と呼応させているのかもしれない(どこか芭蕉の「夏草や」の句にも似ている)。16・17は大正13年の歌である。その年八重は数えで80歳(傘寿)であった。16「いつしかに」は80歳を迎えた感慨、そして17「相生の」は茶道で用いる茶杓を自作した際に添えられた歌である。

18から22までは昭和3年の詠である。この年に詠歌数が多いことには理由がある。旧会津藩主松平容保公の孫娘勢津子と秩父宮殿下の御成婚が行われたことで、60年ぶりに朝敵の汚名がすがれたからである。その喜びは18「いくとせか」として高らかに詠われている。むら雲が晴れて嬉しいのは八重ばかりではない。それは旧会津藩士すべての喜びでもあった。その反面、19「六十とせの」にあるように、60年

の経過によって顔見知りが少なくなったことへの寂しさも詠まれている。

20「ふるさとの」は、会津高等女学校で9月28日に行われた成婚記念の展示会に出品されたものである。この時の歌も同時に送られている。21「数ならぬ」は日赤篤志看護婦としての働きを認められて銀杯を賜った時の歌である。この場合の「大君」は昭和天皇のことを指す。なお「ながらゐて」は本来ならば「ながらへて」であろうが、八重特有の方言表記となっている。22「千代ふとも」は、11月に黒谷で開催された京都都会津会における記念写真(前列に八重も写っている)の裏に自筆でしたためられている和歌である。

23・24は昭和4年の詠である。この年以降、風間久彦宛の書簡に書かれた和歌が多くなる。久彦は京都都会津会の学生幹事を天野謙吉と二人で務めた縁で、八重とかなり親しくしていた。卒業後、久彦は宇和島高等女学校の数学の教師として赴任する。そこから二人の恋人同士のような文通が続いている。24「老ぬれば」は久彦への返事が遅れたことの弁明に詠まれた歌である。久彦が八重に宛てた手紙は、あるいは現在も広津家に所蔵されているかもしれない。

25から32までは昭和5年の歌である。この年はちょうど裏の40周忌に当たっている。また八重は最後(3度目)の会津若松訪問を行っており、そのために歌を詠む機会が多かったのであろう。25・28・29は裏の40周忌の歌である。このうち29「あづさゆみ」は、25「ありし世に」と一緒に群馬の柏木義田に書き送った歌でもあるが、「同志社同窓校友会報」39号では冒頭が「あづさ青」と翻刻されており、長らく意味不明であった。それが久彦宛書簡の中に、「あづさゆみ春たち来れば」とあったので、これでようやく正しい本文が判明した。なお25の下の句は3と一致している。

26・27は久彦の病気見舞いに行けなかったことを詫言いで詠んだ歌である。26末尾の「おもひこそやる」は係り結びなので、「おもひこそやれ」とあるべきだろう。いずれにしても八重が裏以外のの人にこれだけの和歌を送っているのは他に例がない。30・31・32は「ふるさと忘れがたく」という詞書で、故郷会津若松を思って詠んだ歌である。「同志社同窓会学友会期報」55号(一九三〇年二月)には4首掲載されているが、その中の「東山」歌は大正10年に詠まれた15である。あるいは32「老ぬれど」にしても、内容的にこの時の歌ではないかもしれない。

この年八重は数えで86歳であった。おそらく今回の最後の会津若松訪問になるだろうという自覚もあったのだろう(この折に大龍寺に「山本家之墓所」建立を依頼した可能性が高い)。31の「たらちね」は、普通には「母」にかかる枕詞とされているが、ここはそれでは解釈できない。というのも、八重の母佐久の墓は京都(若

王子の同志社墓地)にあるからである。そのためここは枕詞的用法ではなく、単に「親」の意味で取りたい。八重の父親権八の墓なら、間違いなく会津若松にあるからである。

八重が訪問したのは4月ということ、ほととぎすも詠みこまれている。なお30・31の2首は、これを半紙に書いて蘇峰に与えたものが、神奈川の徳富蘇峰記念館に所蔵されている。八重は会津若松からの帰り(5月)に、東京で蘇峰と接触していたのである。これを含めて蘇峰宛の手紙の中には、八重の和歌がしたためられたものもつとあったのではないだろうか。

33・34は昭和7年の正月念頭の歌である。八重はこの年数えて米寿を迎えている。この年の6月に八重は数え88歳で亡くなっているので、今のところこの2首が八重の最後の和歌ということになる。ただし風間久彦宛書簡により、33「あしたづの」は前年の12月27日以前に既に詠まれていたことがわかった(正月に届くように配慮)。「米てふ文字」とは、「八十八」つまり米寿のことである。なお34の「曉鶉声」という題は唐突だが、実はその年の宮中歌会始のお題であり(その年の干支は申)、八重はそれを念頭において詠じたのであろう。

## 五、おわりに

以上の34首が、現在わかっている八重の和歌のすべてである。亡夫襄・会津若松・風間久彦及び自らの長寿を歌った歌が大半を占めている。わずかながらもキリスト教関係・茶道関係はあるが、篤志看護婦関係の歌は見当たらない。

その他(参考)としてあげた35「こまやかに」は、古書目録に八重の和歌として掲載されていたものであるが、八重の歌がどうかは未詳(「大野ぬし」が誰なのか不明)。また36「たけの子を」は、会津新選組記念館に新島八重の和歌として展示されていたのだが、筆跡と詠みぶりに違和感がある。「八重」もしくは「八重子」とあるからといって、それを軽々に新島八重の和歌とするのは危険である。井深八重をはじめとして、歌の詠める八重もしくは八重子が世の中に(福島にも)複数存在するからである。

最後に「八重の桜」絡みで述べておきたいことがある。実は八重の和歌34首の中に、桜の歌も梅の歌も見あたらないということである。歌から言えば、八重は梅とも桜とも無縁だったことになる(誕生日は冬)。それにもかかわらずNHKテレビ歴史秘話ヒストリア「明治悪妻伝説初代ハンサム・ウーマン新島八重の生涯」のエンディングで、

めづらしと誰か見ざらん世の中の春にさきだつ梅の初花

という歌が詠みあげられたことで、これを八重の詠んだ歌と誤解した人もいたようだが、これは湯浅半月が八重の死後に詠んだ歌である。新島襄とのかかわりからすれば、梅の方が桜よりふさわしいのだが、大河ドラマが「八重の桜」としたこと、にわかには八重と桜との奇妙なかかわりが生じてしまった。

## 〔注〕

(1) 吉海直人「吉野山」歌顛末記」同志社談叢27・平成19年3月、同「吉野山」歌補遺」同志社女子大学総合文化研究所紀要28・平成23年3月参照。また吉海直人「八重の蘇峰宛書簡六通の紹介——徳富蘇峰記念館所蔵——」総合文化研究所紀要30・平成25年7月、同「八重の風間久彦宛書簡の紹介——風間健氏所蔵——」総合文化研究所紀要31・平成26年7月も同様である。

(2) 八重と同時代の会津女性の和歌として、西郷頼母の妻千重子の「なよたけの風に任する身なれどもたまぬ節はありとこそ聞け」や、中野竹子の「ものふの猛き心にくらぶれば数にも入らぬ我が身ながらも」などが知られている。

(3) 襄が八重宛の手紙に和歌を書き添えていたとしたら、おそらく八重も返書に和歌を添えたに違いない。2人の和歌の贈答は幻想でしかないのだろうか。なお明治20年7月、八重は札幌で旧知の日向ユキと二十年ぶりに再会し、記念写真を撮影している。その折ユキは、

幼な友達新島八重子様に会ひて

うれしさによる年波もうち忘れまたのあふせをいのり居るかな

と歌を詠じている。おそらくこれに和する和歌を八重も詠じたと思われるのだが、残念なことに伝わっていない。

(4) この竹と雪からは、かつて襄の祖父が襄を叱る際にあげた「にくくては打たぬものなり笹の雪」という俳句が想起される。また八重の茶名「宗竹」にも、この歌が踏まえられているのかもしれない。廣瀬千沙子氏「新島八重の茶の湯」『新島八重ハンサムな女傑の生涯』(淡交社)平成24年10月参照。

(5) 八重は襄の命日、特に10年忌毎に歌を詠じている可能性が高い。その和歌が今後発見されることを切に期待したい。